

# आयूस: あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学図書館／京都市宇治市槇島町千足80

## 大英図書館のこと

副館長・助教授 伊藤和男

ロンドンを訪れる人々が必ずと言っていいほど行く場所の1つが大英博物館である。その貴重な数多くのコレクションの中に、大英図書館所蔵のマニュスクリプトがある。19世紀中頃に今日の姿が完成されたこの博物館は老朽化のため修復工事が行なわれ、その結果館内の有名なリーディング・ルームが従来のような許可された人々のみ利用可能なものから一般の利用可能なものに姿をかえることになった。この大英図書館のリーディング・ルームはかつてここで研究のための読書に人生の貴重な時をささげた多くの人々の歴史、その重みを充分感じさせてくれる。今はレファレンス専用のもので一般に公開されている。そして館内にあった大英図書館本体は、博物館の少し北方にあるセント・パンクラス駅の西隣りに1997年に移転し、新たにオープンしたのである。

この古い駅舎の隣りに位置する大英図書館は、外観がイギリス的というより、東洋的、多国籍的とも形容しうるユニークなものである。はじめてロンドンを訪れた時、私が見たシェイクスピアの二つ折り判の本、ベートーヴェンの第六交響曲、「田園」の自筆楽譜、詩人ワーズワースの詩を愛妻メアリーが書写したものなど、実に多くの芸術家のマニュスクリプトのコレクションが今回も私をむかえてくれた。人類の長く苦しい歴史の中に明るい、強くたくましい、なぐさめの光を与えてくれた人々の自筆に接し、深い感動をおぼえたのである。イギリスの国立図書館であり、許可され

た人々以外はその新しいリーディング・ルームには入れないのであるが、一般の人々のために常に展示されているマニュスクリプトに直接ふれることが出来るのはすばらしいことであろう。出口の所にいる館員が口頭によるアンケート調査をしていた。私は展示物の照明が暗くて見にくいことを指摘したのだが、強烈な光から大切なマニュスクリプトを守る目的があるとの答が返って来た。でも、もう少し工夫をという思いを抱きながら図書館を出た。外はピアッツァと呼ばれる広場になっていて、何かイベントのある時などはここを利用するという。

この新しい大英図書館にはカフェ、レストランがあり、訪れる人々がゆっくりと時間をかけて見学出来るようになっている。ロンドンの博物館、美術館などは、最近の観光客の増加などにも対応するためであろうが、必ずと言っていいほど新しいカフェ、レストランを作り、自国の文化財産の世界的享受、鑑賞とも呼びうるものを目指し努力している感じが感ぜられる。

図書館で出会ったシェイクスピアのあとを追って、私は新しくテムズ河の南、サウスバンクに出来たグローブ座を今回も訪れた。1998年にオープンしたもので、シェイクスピア時代のグローブ座を復活させたものである。館の内外に見られたシェイクスピアの「この世はすべて舞台」という有名なセリフが深い感動をともなって私の脳裏を去らなかつた。

## 僕の名はトン吉君

教授 小川 隆 宏 (器楽)

「秋の夕日は釣瓶落とし」とはよくぞ申したもので刻々に迫る夕やみ、まるでスライド映画を見ているようだ。この町に宵が訪れるといずこからともなく人気が増え始め夜遅くまで賑わいを呈する。御池から北は大人のやや上品な町、南は四条辺りまでは若者たちのグループの街、とはっきり別れる。軒並みは食堂街と言うよりも、少々小粋な町である。この町を名付けて木屋町筋と呼ぶ。

ここ二条の木屋町は森鷗外の『高瀬舟』で有名であるが、主として材木を大阪まで運搬するために、京都伏見までの運搬の通路として秀吉時代、慶長16(1612)年に角倉了以が開いた運河である。この高瀬川発祥の地に小生は生まれ育った。断片的に幼少のころの覚えはあるが、今でいう幼稚園時代の経験は無く、始めて小学校の一年生として銅駝小学校に入学する。この辺りからハッキリと記憶が残っている。当時は男子と女子の各一組ずつで小生の男子組担任は大坪先生、隣の女子組の担任の先生は津田先生であった。始めての机に座ってそこで渡されたものは一枚の画用紙とクレヨン1セット。「何か絵を描きなさい」から教育が開始する。何の経験もなく始めて渡されたクレヨン。どうするのかも分からないままに、絵を描き始めた。ふと、窓側を見ると谷水君がせっせと絵らしきものを描いていた。多分彼は桜の木を描いていたように記憶する。窓側に太陽の光線が当たって眩しく赤く見えたので早速カンニングが始まった。赤く塗るものだと思ってまねをした。

翌日母親と一緒に職員室に呼びだされ、絵を見せつけられ、開口一番「お前は色盲か！」と怒鳴られた。爾来絵は一切描くことをしなかったし、描こうとしなかった。もしその時素晴らしい絵だと褒められていたものならば、ピカソ以上に不思議な絵を描く画家になっていたかも知れない。音楽の授業だけは隣の組の女の先生が交換授業で歌を教えに来られた。恐ろしい怖い先生と言う印

象しか残っていない。歌を教わると言うよりも音感教育を徹底して教わったという記憶のほうが印象深い。その当時世界情勢が緊迫していたので、いつ敵の飛行機がやって来るかも知れない、その飛行機の音が敵か味方かを判別するための音感教育。その特訓で始まった。間違えるとタクトの先が頭をかすめる。そのタクトも太い長いむちの様なタクトであった。今にしてみるとこの音感教育が今頃に生かされるとは努々おもわなかった。小学校四年の時その12月8日朝、全校生徒が校庭に集められ校長松本先生から大東亜戦争が勃発したとの訓示があった。学校は国民学校と改名された。校庭の鉄棒にはつららがぶら下がり、歩く運動場はサクサクと霜柱が砕けて鳴っていた。小学校の東側に加茂川が流れている。夏ともなれば大きな柳の木の上にトンボの大群が飛び廻っている。「べっこう」(銀ヤンマ)が一番の獲物であるがこの中でも「ドロ」と言う翅がチョコレート色にしかも透き通っている奴で雌のトンボが本命である。これがなかなか釣れない。しかも50匹に1匹位の比率で悠々とスイスイ飛び廻っている。このトンボを釣りたいのである。仕掛けは左手から右手にかけて1メートル程度の長さのシケイト(絹糸の撚りのかかっているトンボ釣り専用の糸)の夫々の先に小豆粒位の大きさの小石を謄写版用の使用済み原紙に丸め込んで、右手の人差し指を起点として丁度格好な獲物の10センチ位前に放り上げるのである。獲物の高さは10メートル位はあろう。時々狙ってもいない「ヤンマ」にクイッとひっかけられもち去られたり、木や電線に仕掛けの糸がまきついてしまう。なかなか難しいゲームである。捕れたトンボを左指右指の間に羽を挟んで、まるで指輪のように両手にたくさんの獲物を持っていることがトン吉の英雄の姿である。今はほとんど見ることが出来ない不思議な光景が思い出としてくっきりと浮かんでいる、トン吉君頑張れ!

## ＊ 私のすすめる 3冊 ＊

助教授 林 法 隆 (国際関係論)

### 1 『古典外交の成熟と崩壊』

高坂正堯；中央公論社

著者の描いた外交は、第一次大戦以前のヨーロッパを彩った「古典外交」であった。その古典外交も時代の変化とともに、存在理由が奪い去られてしまった。それにもかかわらず、「古典外交」に近い外交が現代外交より大きな成功を収めた例を、著者は重視する。それは外交の理論より、智恵であり、自己主張と自制、協力と自立とのバランス感覚、そして外交の限界を知る「慎慮」である。アメリカのユニラテラリズム (単独行動主義) が目立つ今日、本書の示唆はますます教訓的である。

### 2 『世界戦争犯罪事典』

秦郁彦・佐瀬昌盛・常石敬一 [編]；文芸春秋

近年、「戦争の記憶」や「歴史認識」が問題とされることが多い。しかし、より重要なのは記憶より記録であり、歴史認識よりも歴史そのものである。本書は20世紀の「戦争犯罪」を正確に記録することに主眼を置いている。「東京大空襲」「ヒロシマ・ナガサキ」「カティンの森」から、大戦後の「天安門事件」「ポル・ポト政権の虐殺」「タリバンの虐殺」そして「米国同時多発テロ」まで260項目ほどの惨禍の記録がぎっしり詰まっている。戦争を回避するために必要なのは、正確な事実の把握である。

### 3 『パレスチナが見たい』

森沢典子；TBSブリタニカ

私塾で子供たちを教える元保育士が2002年3月、情勢の悪化するパレスチナを一人で訪れる。空爆の爪痕を深く残す街には以外にも沈鬱な空気が漂っていない。失業者は半数近くいるのに、浮浪者がいない。そこには助け合い、笑いを絶やさない人々の姿があった。彼らは家族を殺され、家を破壊されても、翌日には花を植え、冗談を飛ばしていた。武力で脅かされても、普段通りの暮らしを続けること、それが、パレスチナに住む人々の「沈黙の抵抗」だったと、著者は見る。

本

世にある万巻まんがんの書も  
あなたに幸福をもたらさしはしない  
だがそっと教えてはくれる  
あなた自身へと帰る道を

およそあなたが必要とするもの  
それらはすべて 日も星も月もそこにある  
なぜならあなたの求める光は  
あなたみずからの裡うちにあるからだ

万巻の書のなかに  
あなたが久しく求めてきた叡智は  
今やどの頁からも輝きでる——  
なぜなら叡智は 今こそあなたのものだからだ

—— Bücher ——

『ヘッセ詩集』 ヘルマン・ヘッセ 山口四郎 訳 (角川文庫)

※ この詩は、詩集『夜の慰め』(Trost der Nacht) に収められた詩で、生前最後に出されたヘルマン・ヘッセ(一八七七一—一九六六)の詩の決定版とされる詩集『階段』(Stufen)にも収められています。

## 『健康のためのスポーツ医学』を読んで

食物栄養専攻II回生 山下友子

この本は、私が所属するゼミの夏休みの課題として与えられたものです。新書判サイズで図表も多く掲載され楽勝と思っていたのですが、読み始めてみると難解でページがなかなか進みません。後日、ゼミ担当の森井先生に尋ねたところ、この本を読めば、生理学や運動生理学を十分理解できるそうです。

この本の著者である池上晴夫氏は、東京大学医学部卒（医学博士）で、筑波大学体育科学系教授であり、運動処方第一人者として著名な人物です。幾分難解な箇所もありましたが、料理とスポーツが好きな私にとって、この本は「食事（栄養）と運動」について興味深い内容を多く含んでいました。

第1章では、運動のエネルギーとなるアデノシン三リン酸の供給を有酸素運動や無酸素運動を題材に説明し、第2章では運動によるからだの生理的機能の変化について、高所トレーニングや無重力そして喫煙などをテーマに生理的な機能の適応をわかりやすく解説されています。また、第3章の「健康に役立つ運動をするために」では、肥満解消のための食事療法と運動療法について言及され、いずれの療法にも一長一短があり、両者の組み合わせこそが健康的なダイエットや肥満予防であることを強く感じました。食事量や摂取カロリーを落とせば、体重は簡単に減少します。しかしその減少は、脂肪だけではなく筋肉や骨にも及んでいることを知るべきです。さらに第4章では、実際に運動をプログラムする際のポイントがまとめら

れています。日本人は運動と聞くと、どうしても苦手なスポーツ種目や中学、高校の部活動で実施してきた種目を考えてしまいます。森井先生曰く、健康のための運動とは、限られた種目ではなく身体のコネディショニング（筋力、スピード、パワー、敏捷性・バランス、柔軟性、心肺持久力）をトータルに鍛えることであり、それぞれ異なったトレーニング方法が存在するとのこと。運動やスポーツをただやるだけでは効果はなく、運動の条件（運動様式・強度・時間・頻度）を考慮したプログラムをデザインする必要があります。

最後に本書を読んで大変重要なことに気づきました。健康のために運動を実施することは大変重要なことですが、運動もまたストレスであるということをお忘れてはいけません。このストレスによりコンディションは一時的に低下（疲労）します。そこで栄養が大切な役割を果たすわけです。スポーツの現場においてウエイトコントロールという言葉がよく使われます。減量にも増量にも用いますが、栄養（食事）の位置付けが大変重要であり、成功するも失敗するも食事に関係するといっても過言ではありません。人の健康を考える上で、今後さらに栄養と運動の関わりを理解する必要があることを強く感じました。スポーツをする人、栄養を学んでいる人、是非とも一読してみる価値のある本だと思われます。では！これからテニスに行って来ます。

池上晴夫著：『健康のためのスポーツ医学』

（講談社）